

## 「がん統計の活用と未来」シンポジウム開催報告



**猿木 信裕** JACR理事長

群馬県衛生環境研究所

日本がん登録協議会(JACR)では、日本医師会と共催で、2019年11月17日に「がん統計の活用と未来」をテーマにシンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、はじめに横倉義武日本医師会会長が主催者を代表して、開会の挨拶をされました(道永真理日本医師会常任理事代読)。続いて、厚生労働省健康局長の宮崎雅則先生、国立がん研究センター研究所長・がんゲノム情報管理センター(C-CAT)長の間野博行先生、一般社団法人National Clinical Database(NCD)代表理事の岩中督先生にご挨拶をいただきました。

引き続き、それぞれの分野の第一人者の先生から、全国がん登録やがん登録先進国の紹介、拠点病院の院内がん登録データの紹介、診療群分類包括評価(DPC)データの活用事例、NCDの歴史や専門医制度との関係、製薬企業に行ったがん登録に関するアンケート調査、C-CATの現状と課題、希少がんを例にMASTERKEY PROJECT等についてお話しいただきました。

がんゲノム医療もスタートし、これからは、がん登録データと各種データの連携により、国民へのデータ還元が進むことが期待されています。日本は健康達成度世界一を実現しましたが、高齢化、少子化、医療費の増大等、様々な課題に直面しています。

JACRとして、行政、がん登録関係者、臨床の先生、患者会の皆様と協力して全国がん登録体制の構築・発展に貢献していきたいと思っておりますので、今後ともご指導よろしくお願ひいたします。

シンポジウム開催にあたり、貴重なご講演をいただきましたシンポジストの皆様、ご協力、ご協賛いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

今回、演者の皆様のご厚意により、Japan Cancer Information Partnership(J-CIP) Webに音声つきパワーポイントの資料等を掲載しましたので、ご覧ください(<http://jacr.info/j-cip/empower/symposium.html>)。

## シンポジウム I 「がん登録データ利用の未来」の紹介



**茂木 文孝** JACR理事

群馬県健康づくり財団

この数カ月後には新型コロナウイルスに世界中が蹂躪されるとは夢にも思わなかった晩秋の穏やかな日曜日、学究の人々が多く日本医師会館に集い、平和裡にシンポジウムが始まった。シンポジウムIでは、がん登録データの利用状況を俯瞰しその先を探る視点から、二人の先生にご登壇いただいた。

「全国がん登録データの利用の未来」 松田智大先生

講演の前半では、がんの一次、二次、三次予防の各段階で、がん対策のモニタリングとして利用できるようになった事例と、それらの問題点が報告された。後半では、利用のために解決すべき課題として、データ(特に匿名)が利用しやすい法的環境や、データの有用性についてのマスコミや国民の理解を挙げたが、特にこれからのがん登録で重要なのは、他のデータベースとのリンケージであるという。がん登録データと他のデータを、リンケージと言うよりもシームレスに融合させている韓国やデンマークの例では、がん登録はすでにがんのビッグ

データの一要素になっていることを教えていただいた。

「院内がん登録データ全国集計の分析」 奥山絢子先生

院内がん登録は項目内容が全国がん登録より詳細であり、がん治療の拠点となる病院から届出がされているという特徴がある。これを生かして、通常集計に加えてがん診療の問題点を提起したり、臨床診療の基礎データを提供するための特別集計や、医療施設での病期別、治療方法別の登録数をWebで閲覧して診療実態を把握できるシステムが紹介されていた。

患者さんや臨床医に対して希少がんも含めた情報提供を充実させることが、院内がん登録の今後の方針であると知らされた講演であった。

お二人の講演を拝聴し、今のところ二つのがん登録が目指すデータ利用の未来が異なることを感じたシンポジウムであった。